

暮らしを彩る



Friday

技術が拓く未来 Monday

世界の潮流 Tuesday

読み解く Wednesday

輝く人・組織 Thursday

2025. 10. 24

兄弟関係から見た歴史

来年のNHK大河ドラマの放送予定は『豊臣兄弟!』という。豊臣秀吉の弟 秀長の視点から戦国時代を描くらしい。

そもそも農民の家に生まれた秀吉には家臣などいるはずがなかった。弟として秀長がいたことはありがたかっただろう。軍制に加わただけではなく、検地などの戦後処理、諸大名との交渉、接待役あるいは調整役などを務めて、補佐役として大いに役立ったにちがいない。その人柄についても、威厳があつても穏やかであり、仁義にあつた人物であつたらしい。このような温厚篤実な性格であれば、肉親にしか頼らざるをえない秀吉にとつて得難い側近であつた。

秀吉が織田家を出世したころ、

文藝春秋オピニオン 2025年の論点100

文藝春秋 編

◆文藝春秋 (1870円)



今回の一冊は巻頭言「スペシャル」から始まる。

この中で田原総一朗と小説家五木寛之が対談をしていて、五木がテレビ朝日の「朝まで生テレビ」を「昭和の象徴」と言っている。『アサナマ』と呼ばれるこの番組は37年前の春から始まった。番組の第3回目は「討論原案」だった。原案推進論者と反対論者とを討論させる企画だった。

往時、評者は電事連広報部長だったのだが、テレビ朝日の日下雄一プロデューサーから原案推進の論客を出してほしいとの依頼があった。電力業界に専門家はいても、説得力のある論客となると人選は難しい。出演者は全真テレビに出るのは初めての人ばかりで、強い照明ライトに耐えられるかなど懸念が先に立った。生放送だから真夜中に集まってもいい、明け方解散ということだった。

しかし、この番組作家の五木から、昭和の象徴、と言われたと、関わっておいでよかつたとも思う。

また、本書では女優草笛光子が幼い頃の体験を語っている。

彼女は「戦争にまつわる一番の思い出は食べ物になつたこと」と言っている。太平洋戦争敗戦の年が小学校一年生だった評者としては、生活環境がほぼ同じで、この発言に同感だ。必定、評者にとつて、亡き父母の不安さと思われて胸が痛む。

「アサナマ」からA Iまで多様に

紹介する人

梶本 晃章

元東京電力副社長



本書にはベストセラーの昭和史という10回のコラムがある。その中に愛情は少量の「ヒート」がある。この本は、太平洋戦争末期にスパイで逮捕されたソ連のソルゲに連座して逮捕され、牢獄にいたジャーナリスト尾崎秀実が獄中から愛妻に出した手紙をまとめた書籍集だ。淡々と描かれた書簡には妻英子に対する愛情があふれていて、読む者の胸を揺さぶる。二人は敗戦直前に死刑になった。この本は評者の本棚にあるものとも古い一冊で、世界評論社の表紙をはじめ、全体が古びて茶色っぽくなっている。昭和21年9月発行のこの本は、中学校の教師からいただいたもので、評者の個人的思い出が詰まっている一冊だ。

最終事業「科学・医療」には、「ドローン」も含まれている。AI技術が生活の隅々まで普及するだろうという。しかし、個人的にはAI技術によつて利便性は増すだろうが、人間の能力がどうなるのか大いに気になる。今回の一冊には百人を超える人が小論を寄せている。読者の多様な関心に応ずるに違いない。文春らしい一冊といえよう。

ウェブ 時評 wave



本村 凌二

もむらりょうじ 東京大学名誉教授。専門は古史。著書に『多神教と神教』『教養としてのローマ史』、『羅馬の世界史』。次郎 他多数

秀吉の暴走がはじまったことでも、秀長の存在の重厚さを示唆してありある。

この豊臣政権に先立つ事例として、戦国大名の毛利元就の三本の矢の遺言も名高いものがある。

元就は一代にして中国地方数か国を領する大名にのし上がった毛利家を率いており、なんとしても息子たちの結束を固めなければならなかった。かつて家中を一本化するためとはいえ、元就は弟を殺めていたという心の傷があつたのだらう。

は35歳の隆元、28歳の元春、25歳の隆景の息子三人に三兄弟の結束を求める三教訓を送ったという。父たる元就は必ずしも家臣団が信じるに足るとは思っていない。矢の遺言も名高いものがある。元就は一代にして中国地方数か国を領する大名にのし上がった毛利家を率いており、なんとしても息子たちの結束を固めなければならなかった。かつて家中を一本化するためとはいえ、元就は弟を殺めていたという心の傷があつたのだらう。

反乱鎮圧のために出陣中、元就を動かした薩長の勢力のなかで注目されてもいいだろう。

ことばの海 電子の宙

アナログとデジタル

東京大学

坂井 修一

ある本の中で、腕木通信について書いたことがある。腕木通信は手旗信号の大きなもので、18世紀末から19世紀前半、つまりナポレオンが活躍した頃に、フランスで使われたものだ。

小説「モンテ・クリスト伯」の中でもこの腕木通信が登場する。主人公のクリスト伯は、通信士を買収し、腕木の形を変更させて通信内容をすり替え、仇敵に偽情報をつかませて大損させる。そんなお話だ。今というサイバー攻撃の類である。

私の本を読んでいただいた某紙の方が、「自分などアナログ人間にも、アナログ時代のこの話はよくわかる」と感想を書かれていた。

確かに19世紀にはコンピュータもインターネットもなかった。アナログ時代と言えはその通りで、この記者さんの書かれていたことは間違いない。取り上げていたことに感謝しつつ、しかし、私は思った。

腕木通信は、そして手旗信号も、アナログではなく、デジタルである。もっと言えば、大昔、それも神話時代にやられていたと言われる烽火(のろ)だって、デジタル通信だったのである。

デジタルとは何か。読者諸君には釈迦に説法と思うが、念のために申し上げれば、デジタルとは、いろいろな情報を「数」で表すことである。ここである形状は、必ずしも二進数を意味しない。腕木通信は、腕木の形状によつてアルファベットを表す。形状は離散的な記号だから、「数」と言つてよいのである。手旗信号も、烽火も、同じで、すべてデジタルなのだ。

20世紀の中頃からの電子技術は、確かにめざましいものがあつた。今年、地球上のデータ通信量は1.5エクサバイト(1.5の21乗)になると言われている。また、世界最高速のデジタルコンピュータの処理速度は、最大1.742エクサフロップス(エクサは10の18乗。フロップスは1秒間に実行できる実数計算の数という。E1: Capitanという計算機。昨今のAIブームが、これらに代表される情報処理の力を基盤とすることは言うまでもない。

それでも、私は思う。電気はなかつた太古からのデジタル技術が築いたものは、やはり大きかつたのだ。コンピュータは、実は電気がなくても作ることができる。蒸気力で動くコンピュータは、世界で一台だけカリフォルニアのコンピュータ歴史博物館に置かれていた。これを作った物好きを、私なく、苦笑しつつもちよつと羨ましかったりするのだ。(次回は12月5日掲載)

ドブコンナ-3

2025年9月1日から予約開始!

次世代の消費電力削減に貢献する
エコエネくんが2026年に誕生します!

省スペース設計により従来型トップランナー油入り変圧器との置き換えが可能!
待機電力を極力低減した省エネ設計・安全性・環境調和型(天然エステル油FR3を採用)
世界96カ国に納入実績がある変圧器メーカー JSHP とWINコーポレーションの共同開発商品です

省エネ
省スペース
環境調和
高品質
納期3~4ヶ月

* 個別条件により異なります。

販売代理店 合同会社 DMM.com
DMMenergy

お問い合わせ: 0120-656-065 メール: energy-transformer@dmm.com

https://win-inc.co.jp/